

憧れの住む町

秋野 成道

(前号のあらすじ)

水道橋にある花旅館は、主人の矢崎昭一が急逝してからは妻の花が引き継ぎ、外国人観光客向けの旅館として新装開業した。前職を退職していた伊沢文夫、山田誠三、近藤咲子の三人に、一度は隠居をした本名後藤徹のGさんが加わって、順風満帆な営業を続けていた。因みにGさんは「爺さん」のことであるが、本人は後藤のイニシャルだと思っている。

七 黒船現わる

新装開業より三年目のことである。花旅館は常に満室を維持していた。台湾、韓国、シンガポール、オーストラリア、そして欧米からのお客で賑わっていた。

そんなある日のことである。Gさんがこんな話を聞

き込んできた。

「俺の知人で、この先で古本屋をやっている夫婦がいるのを知ってるよね。昨日久しぶりに顔を出してみると、店をたたんで土地と家売ることに決めたと言うんだ。今じゃ古本屋もチェーン店が増えて、一店舗でやっていくのは大変だとこぼしてた。長い間良く頑張ったと思うよ。この土地の知り合いがまた減るのかと思うと寂しいね。でも問題はその売り先なんだ。売ったのは外資系のホテルチェーンらしい」

この古本屋は代々の百姓だったが、戦後古本屋を始めた。古本屋の店舗の奥は、店からは想像もつかない立派な庄屋風の屋敷がある。これを取り壊して近代的なホテルを建設するのかもしれない。店舗は取り壊して、奥の屋敷を改装して日本旅館にするらしい。

「内装工事だけなので、三か月で開業するらしい」とGさんが言う。

「もし、私たちの評判が良いので、柳の下の泥鰌を狙うのだったら名譽なことね。私たちが同業者から評価されたってことじゃない。地域の活性化にもなるわね」

花に心配する様子はなかった。山田が、

「同業者が出て来るのは、張り合いがあって良いね。」

「負けないようにもつと頑張ろうと、気力が湧いてくる」

と言うと、皆も賛同したのであった。

七月の夏休みが始まる頃、古本屋を改装した旅館がオープンした。インターネットのホームページを見ると、ゲストハウス『縁』という名称で、個室が八つとドミトリタイプの大部屋が十部屋ある。規模は花旅館の五倍以上である。旅行会社や旅行サイトとも提携していた。宣伝効果とオープン景気もあって、開業からかなりの集客をしているようだった。その影響か、満室を続けてきた花旅館にも空きが出る日があった。

日曜日の定例ミーティングでGさんは心配して、「女将さん、だいじょうぶだろうか」と言っても、花は、

「少し手隙の時間ができていいのよ。一本調子で満室だと気が緩んで慢心するわ。良い刺激じゃない。皆さん、適当に休みを取ってね」

とむしろこれを歓迎しているようなのだった。

秋になった。夏休みの外国人客が帰国し、秋の観光シーズンになった。しかし、東京には紅葉を楽しむ場所が少ないので、集客は少し落ちる時期である。

定例の日曜ミーティングで伊沢がこんな話をした。「夏の繁忙期も終わったので、『縁』がどんな話ところ

なのか、調べてみてはどうでしょうか。何かこちらも取り入れられるような点があるかもしれません」

「私も少し気になっています」と咲子も相づちを打った。

どんな施設か見てみたいが、花旅館の五人が偵察に行くのはあまりにもえげつない。また客観的な比較ができない可能性がある。

「ご家族には迷惑かもしれないけど、イーさんと誠さんの奥さん、それに咲ちゃんのお母さんに見てもらえないかしら」と花が提案した。

もうこのころは姓を呼ばずに、愛称で呼び合うようになっていた。伊沢はイーさん、山田は誠さん、近藤は咲ちゃんである。

そこで、伊沢の妻由美子、山田の妻幸子、咲子の母富子に、まず花旅館に試泊してもらおう。そして、後日『縁』に泊まってもらうことにした。

試泊が終わった。全員の都合の良い十月の日曜日に寸評会を開いた。

「『縁』での宿泊の体験でお気づきの点や、参考になる点があったら教えてくれませんか」

花がそう促すと、咲子の母富子が次のような感想を述べた。

「『縁』は機能的で、きれいな旅館だと思います。一泊六千円でした。個室は一万円です。食事の提供はありません。自販機があつてパンやおにぎり、飲み物を購入できますがコンビニより割高です。お風呂にはシャンプーやボディソープは置いてありますが、タオルは自販機で買うようになっています。バスタオルも有料でした。スタッフは若い人だけで、動きはきびきびしているようですが、マニュアル以外の余計なことはないという感じでした。全体的に機能的というより、私のような年寄には、機械的な感じがしました」

花旅館はドミトリが一泊朝食付で四千五百円、八畳の個室は三名以上利用で一人六千円である。お客の到着前に、旅館名を染め抜いた手ぬぐいを枕元に設置しておく。バスタオルは風呂場に置いてある。どちらも無料である。この手ぬぐいは評判が良かった。全員が記念に持ち帰っていた。

伊沢の妻由美子は、

「若いスタッフで運営するフレンドリーな宿というのを売りにしているようですが、笑顔もなくなった作業をしているだけのようでした。なにげなくフロントの女

の子に聞いてみると、ほとんどがパートだそうです」

と言う。山田幸子の感想は、
「ただ寝る場所と割り切れれば良いかもしれませんが、宿にそれ以上のものを求める人には物足りないと思います」

というものだった。続いてこんな指摘をした。

「皆さんが言うように機能的ですが、花旅館のような温かみはありません。親切さやおもてなしを求めて日本に来る外人さんが多いと思いますが、そうした心遣いは感じられませんでした。ただビジネスとして宿泊業をやっているという感じでした。私も主人のお店の手伝いをして多少接客のことはわかるつもりですが、あそこには常連さんはできませんね」

山田も、

「ご常連は人に付くものだよ。その主人や係の人の対応が気に入ったから何度も来てくれる」

と言うと、伊沢も、

「私も前の仕事の時は、どうやってリピーターを作るか工夫をしました。当たり前のことをしていたら顧客は付いてくれません」

と山田夫婦の意見に賛同した。

「お三方のお話を伺って安心しました。旅館とはいえ、

似て非なるものようですね。でも何か良い点もあつたはずです」

と花が尋ねた。

「長期滞在のお客さんのために洗濯機と乾燥機があつたのはよかつたと思います。ただしそれぞれが千円もかかるのはどうでしょうか」

と伊沢由美子がいうと、近藤富子も、

「自販機の料金は高かつたですが、夜遅くコンビニまで行くのは女性には怖いし年寄には大変ですから、置かれていたこと自体は良いと思います」

と指摘した。山田幸子の指摘は、

「貴重品を入れる小さなセイフティボックスがありませんでした。私はドミトリーだったので、貴重品を入れる場所があるのは良かったと思います」

というものであつた。

さらに近藤富子が次のような話をした。

「私は看護婦だったので、夜フロントに体調が悪いので深夜観てくれる病院はないか尋ねてみました。深夜のフロントは東南アジア系の人でした。マニュアルに病院名が書かれているらしく、電話番号をメモしたものを渡されただけでした。お客の立場に立って何かしてあげようとする誠意が感じられませんでした。花旅

館だったら、きつともっと親身に応対してくれると思います」

山田幸子が最後にこんなことを言った。

「朝出発する時に、マネージャーさんらしき若い女性がフロントにいたので、

『ここは、若いスタッフが多いのですね。この先にある花旅館とは正反対みたい』

と言うと、

『知っています。年寄りのスタッフだけでやっているようです。お年寄りには足手まといになるので、ここは若くて明るいスタッフ集団で運営しています』

と言われて悔しい思いをしました」

「わかりました。年寄が足手まといなんて言う小生意気な商売相手が、絶対に太刀打ちできない親切な旅館の真骨頂を見せてやりましょう」

翌日、全員で洗濯機や乾燥機、自販機やセイフティボックスを置きそうな場所を見て回った。

これまで貴重品を預かることはしていませんでしたが、数日後に二十個に間仕切りされた、ダイヤル式のセイフティボックスを帳場の表側に設置した。

自販機は玄関の内側に置きそうだった。ソフトドリ

ンク数種とビールが購入できるタイプを考えた。数社に見積りを依頼したところ、設置料金が無料どころか手数料がもらえることがわかった。補充も設置した会社がしてくれるので手間がかからない。これで商売をするつもりはないので、料金はコンビニと同料金にした。設置会社を決めてから数日後に納品された。

問題は、洗濯機や乾燥機だった。洗濯機の音はどんなに良い機種でも騒音が出る。就寝の時間に洗濯機を使用されると他のお客さんの安眠の妨げになる。

「洗濯だけで四、五十分かかります。乾燥には小一時間かかるので、夜十時までに利用を制限したとすると、洗濯できるのはせいぜい二、三人でしようか」

と咲子が言うと、Gさんが、
「俺は住み込みなので三日おきに洗濯が必要なんだ。女将さんが使う小型の洗濯機もあるけど、俺は不精なので、ここから七、八分先のコインランドリーで洗濯をしている」

「と言うので、一気に問題が解決した。すべてを揃える必要はない。洗濯が必要なお客には場所がわかる地図をコピーして渡せば良い。」

ライバル旅館の利点を取り入れただけでなく、さらに

差別化を図ることを考えた。

「ライバルの出現で、これまで以上に良いサービスを提供する必要があります。これはお客さんにとっては良い事です。無理の無い範囲で、しかもあまり費用をかけずに何ができるか考えてみましょう」

日曜日の定例ミーティングで花がこう言うと、山田が提案した。

「都内観光の引率なんかどうかな。俺も行ってみたいけど、なかなか行けないところがあるんだ。例えばそばなのに、小石川後樂園には何年も行ってない。上野だって大江戸線ですぐなのに、行く機会がない」

「いいですね、それは私たちの楽しみにもなりますね。この時期少し客足が落ちているので、手分けして観光しましょう」

花の決定で、手の空いた日にそれぞれが都内の観光場所を巡ることになった。

十一月から日を決めて、伊沢、山田、咲子が引率して都内の定番でない場所の案内を始めた。朝食後、ラッシュ時間が過ぎた午前九時半に出発して、昼で案内を終了する。

外国人旅行者は、定番の銀座や皇居、浅草、上野、渋谷、新宿、秋葉原、原宿には自分達で行く。彼らが

行きそうもない、水道橋近辺の場所を選定した。小石川後楽園や植物園、神田明神、東京おもちゃ美術館や湯島天満宮、旧岩崎邸庭園、横山大観記念館などを候補にして、その時の宿泊者の顔ぶれで場所を決めた。家族連れがいる時は、東京おもちゃ美術館に、自然に触れたいと希望する客が多い時は小石川植物園に、神社仏閣に興味がある客が多い時は神田明神や湯島天満宮に案内した。

山田も一生懸命英語の勉強をした。と言っても、文法は苦手なので、ほとんどが日本語で、必要な個所に英単語を加えるだけである。

「デイスイズ、かんだみようじん。エブリバデイ、リピートプリーズ、かんだみようじん」

すると参加した人たちは神妙な顔をして、

「カダミョウジ」

と復唱するのであるが、撥音の「ん」がなかなか発音できない。

「ノーノー『かだみようじ』、プリーズ『かんだみようじん』」

その後、神田明神の歴史と年中行事を英単語まじりの日本語で説明するのであった。プロとは異なるヘンテコなガイドが、結構人気があるのであった。

いずれも午前中で案内が終わるので、旅行者は午後も好きな場所に行つて有意義に過ごせる。山田たちにとつても、午後は当日の宿泊客を迎えるための清掃や案内に時間を割くことができた。

この無償の案内は宿泊客から好評だった。利用した客が、ブログなどにこの事を載せてくれた。以前から日替わりで開催していた、山田の囲碁教室、咲子の折り紙教室、伊沢の日本語教室、花の長唄も引き続き好評だった。こうした努力で、再び満室になる日が多くなった。

『縁』も都内観光のオプションを提供し始めた。しかし、旅行会社の有料ツアーなので、利用者は少ないようだった。観光場所が旅行者個人でも行ける定番の場所が多いのが、不評の原因の一つだった。また、料金にマージンを乗せるので参加費が高かったのも、利用者が少ない原因だった。自然とこのオプションは姿を消し、それだけでなく『縁』の宿泊者自体も減っていった。

どこかビジネスライクな機械的なサービスやシステムが敬遠され始めた。形は日本風旅館だが、ビジネスホテルと変わるところがなかった。

さらに悪いことに、十二月中旬の深夜に、ぼや騒ぎが起こってしまった。館内は禁煙のだが、それを無視した客の寝たばこで出火した。『縁』は古本屋の母屋を居抜きで改装したので、煙探知機は設置されていたが、スプリンクラーの数が消防法の規定より少なかった。このことが報道されて、宿泊客は激減した。

花旅館は、改装の際に各箇所法定のスプリンクラーを新設していた。

「手を抜かないで良かった」

と花はよそ事ながらほっとしたのであった。

「でも夜間の対応を考え直す必要がある」

と思った。

夜間は花とGさんが旅館に詰めている。しかし、消灯は十一時なので一晩中起きている訳ではなかった。

緊急の場合は、帳場の呼び鈴を押してもらおう。しかし『縁』のぼや騒ぎから、夜間の対応も必要だと定例の日曜ミーティングで決まった。

伊沢と山田が、週に二度泊りの勤務を始めた。勤務時間を調整して何とか五人でやりくりしたが、日中に手が足りないことが多くなった。

そこで伊沢の妻由美子と山田の妻幸子が、日中の手伝いに来るようになった。

「私たちも何かしたい」

夫の充実を目にして、自分達も何かしたいと思つていたので、花旅館としても大助かりだった。

また、咲子の母富子は最近眠れぬ日が多くなった。

夜になるといろいろの事が頭に蘇って、時には居たたまれないような事を思い出すこともあった。咲子から夜間の勤務のことを聞いて、

「年寄だけど、週に一、二回くらい夜勤ができないかしら。一晩中起きていることもあるので、花旅館で夜勤をしたほうが建設的じゃない」

と言うので、花にそのことを話してみた。

「ありがたいわ。お母さんは看護婦さんだったので、もしも急病人が出たときには助かるわ」

週二回の夜勤は近藤富子が勤めることになった。

花を筆頭とした五人に助っ人三人が加わって、満室を維持することができた。

一年が経過した。

『縁』の客足は減ったが、今でも外国人客が中心であった。建物への出入りが簡単なので、日本人の外人目当ての女性が集まるようになった。彼女たちは外人好みの、髪の高い独特の風体をしている。派手な化粧

と服装をしている女性もいる。英語をほとんど話せない女性もいた。外人を連れて歩くことに優越感を感じているらしい。できれば外人と結婚して、日本人離れた二世の子供を産みたい、そんな願望を抱いているようだった。

こういうタイプの女性がたむろするようになると、教養高い人たちや女性客からは敬遠された。悪い評判がブログやSNSで発信された。まともな観光客は寄り付かなくなった。一方では、こういう女性を目当てにする外人客が増えた。米軍基地のそばにあるバーのような、特殊な雰囲気の旅館になってしまった。

外資系企業は、日本の企業以上に企業イメージを大切にす。『縁』は開業して一年半で廃業した。

八 五周年

開業五周年を迎えた。当初四人で再出発した花旅館は、一度隠居したGさんが戻り、助っ人の近藤富子、山田幸子、伊沢由美子を加えた八人で旅館を切り盛りしていた。

花は開業五周年目に、慰安旅行をすることに決めていた。しかし年内一杯は満室状態が続いていた。

日曜ミーティングで、花は計画を説明した。

「花旅館も五年目を迎えました。これも皆さんのおかげです。そのお礼に、慰安旅行を考えています。年内はたくさんの予約をいただいていますので、少し客足の落ちる一月に旅行することに決めました」

「女将さん、場所は熱海か芦ノ湖あたりですかい」とGさんが尋ねた。

「いいえ、海外旅行にしましょう」

「え〜」

全員が啞然として、その後は相好を崩して拍手となった。

「一月の中旬から十日間は予約を取らないようにしてください」

こうして慰安旅行が決まった。

「私は旅行を決めただけで、後の手配は旅行会社の経験の長いイーさん、お願いします」

伊沢は全員からアンケートを採った。助っ人の伊沢由美子や山田幸子、近藤富子からも解答してもらった。その結果、全員がアジアの都市を希望した。長い飛行時間がかかる場所は敬遠された。海外渡航の経験のある人にこれまでの渡航先を尋ねると、不思議と台湾に

は誰も行ったことがなかった。添乗員の経験のある伊沢でさえ台湾には行ったことがなかった。台湾のツアーは現地の係が出迎えて案内するので、日本から添乗員が同行することはなかった。

日曜の定例ミーティングで伊沢は次のように発表した。

「皆さんからご意見を伺い、花さんとも相談して、行く先は台北に決めました」

全員が頷いた。

「ここに決めた理由はいくつかあります。一つは全員が台湾に行ったことがないこと、そして四時間弱で到着できる点です。自分では若いつもりでいても、世間からはシニアと言われる世代です。長時間のフライトは疲労が溜まり、具合が悪くなることもあります」

「台湾いいね。ほら、ここが新規開業して間もなくの頃、台湾から劉さん夫妻が泊まってくれたよね」

とGさんが言った。

劉さんの一家は、戦後台湾に在留していた日本人に世話になった。この日本人の遺影に感謝を捧げるために、当時は子供だった劉さんが来日した。金婚式も兼ねての旅行だったので、祝賀会を開催した。劉さんはとても喜んで、帰国後にこのことを息子に話すと、彼

がSNSに出来事を投稿した。この投稿になんと三十万以上のアクセスがあつて、その翌日から台湾からの予約が急増したのだった。

「今でも台湾から多くのお客さんが来てくれます。花旅館が繁盛するきっかけでした。それで台北行きに決めました。恩返しも兼ねて、台湾がどんなところなのか実際に体験しましょう。折角なので花旅館に参考になることも体験したいと考えています。はじめの二泊はゲストハウスに泊まります」

と花が続けた。花旅館に形態の近い評判の良いゲストハウスに泊まる。

Gさんが、

「俺は海外に一度も行ったことがないんだ」

と言うと、Gさん以外は全員がパスポートの期限が切れていた。旅行は、伊沢が以前勤務していた旅行会社に手配をしてもらう。そこではパスポート取得書類の作成や航空便の手配、ホテルやガイドの手配も全て代行してくれる。出発は一月十日に決めた。

「よし行くぞ。ニイタカヤマノボレ」

Gさんがそう言うとき全員が、

「トラ、トラ、トラ」

と唱和したのは言うまでもない。

日程は次のように決まった。

一日目は宿にチェックイン後、夕食のレストランに行く。二日目は、ゆっくりと故宮博物院を見学する。

三日目は市内でなく、車で二時間ほどの日月潭に行き二泊する。

五日目は台北に戻り二泊。淡水、九份を見学し、最終日の七日目は忠烈祠の衛兵交代式を観て空港に向かう。同日の夕方に羽田着。翌日は全員休み。

総勢八名になると、旅行会社では団体扱いになる。そのためビジネスクラスの座席も破格の値段で予約できた。花やGさん、近藤富子は八十歳を超えている。

伊沢は、体に負担をかけないようにさまざま面で気を配った。出発も羽田発午後一時半にした。早朝や夜遅い便は負担が大きい。

出発当日の昼、羽田空港に全員が集まった。

Gさんが、
「興奮して昨日は夜中まで寝付けなかった」
と言うと、

「私も」

「私も」

と皆が同じような、小学生の遠足の前日状態だった。

台北に到着して、現地ガイドの案内でゲストハウスに到着した。ここは部屋数五部屋の、民家を改装した宿だった。花旅館と同じく朝食のみを提供する。荷物を解いて、談話室でお茶を御馳走になった。主人の林さんは片言の日本語を話す。この宿は林さん夫婦と娘二人の、四人で切り盛りしている。全員とてもこやかで愛想が良い。花が土産にあげた小川軒のレーズンパイを、とても喜んでくれた。

夕食はガイドの案内で、台北で有名な火鍋の店に行った。ガイドが案内したのは、現地の日本人にも人気のある店だった。火鍋と紹興酒に満足して宿に戻った。

翌日は朝食後に故宮博物院を見学した。博物館は思いの外に歩く時間が長いので、休み休み昼食の時間までかけて見学した。ガイドが、

「この展示物は、蒋介石が本土から逃げてきた時に持って来たモノです」
と説明してくれた。太古の遺物から、青磁器、書画

に至るまでのさまざまなコレクションが展示されている。それでも展示されているのは極一部だそう。昼食は博物院の中のレストランで簡単に済ませた。

午後は、龍山寺と行天宮を見物した後に、日本人にも人気のある古い横丁にも寄ってみた。

夕方は士林夜市の雑踏を歩いた。

「以前はもつとごちやごちやして活気があったのですが、食堂街や夜店が整備されてからは、逆に客足が落ちました」

とガイドから説明を受けた。

「上野のアメ横が、だいぶ整備されてから客が少なくなったのと同じかな」

とGさんが感慨深げにつぶやいた。

夕食は、台北101の最上階のレストランで食事をした。

翌日は日月潭に向かった。文武廟を見学して湖畔のホテルに着いた。ここではのんびり過ごす。翌日は湖を遊覧船で見物して、その後は三々五々自由に過ごした。

五日目は台北に戻った。この日から二泊は圓山大飯店に泊まった。丘の上に位置する大きなホテルである。部屋から台北の市街が一望できた。ここでの滞在中に淡水や九份を観光した。

最後の夜は、ホテルのレストランで夕食を採った。

「どうでしたか、台湾旅行は」

と花が尋ねると、

「冥土の土産になったよ」

とGさん。

「台北の人たちは飾らないのがいいですね」

「故宮博物院でいいものを見せてもらった」

「食事がどこも美味しかった」

皆からさまざまな感想が出た。

「俺はなぜか、はじめに泊まった林さんのゲストハウスが一番良かった」

と山田が言った。

「俺は朝食を担当しているので、それぞれの宿の食事を気にしていたんだ」

一流ホテルの食事は種類も量も多い。

「でも、それは商売人の味なんだな。林さんの宿は、手作りの家庭の味だった。豆漿というらしいが、おかゆの料理がお腹にやさしかった。他でも食べてみただ林さんの所の豆漿が一番おいしかった」

「サービスも良かったと思います。あわててパジャマをベッドに投げ出したまま出かけたら、ちゃんと洗濯までしてくれてベッドの上に畳んでありました」

と伊沢由美子が言った。

「私たちが家族みたいなものです。林さん一家を見習って、家族ぐるみの暖かさをぜひ取り入れましょう」

花が言うのと皆が頷いた。

九 憧れの住む町

それから二年が経過した。

花旅館は連日満室を維持していた。

ある日のこと、夜勤を終えた近藤富子が体調を崩して入院した。軽い脳卒中だったが、それが長引いた。病院は長く患者を置いてくれないので、多少容態が良くなつてからは、入院した病院が経営するリハビリセンターに移った。病気のショックで徐々にアルツハイマーの症状も出るようになった。センターの医師の勧めで、運よく特養施設に移ることができた。

母の世話で咲子はしばらく休まざるを得なかった。その穴は皆でカバーした。施設に移って三ヶ月目、富子は亡くなった。

咲子が花旅館に復帰したのは、母が逝去してから二週間後だった。

「ご迷惑をかけました」

そう言う咲子はかなりやつれていた。

「大変だったね」

「でも、これからは心配がないのでまた以前のように頑張つて働きます」

この年の夏、Gさんは米寿を迎えた。八月下旬の一日だけ予約を入れずに、その夜米寿のお祝いをした。「みんなありがとう。よくここまで仕事ができたとと思うよ」

「Gさんには昭和五十八年からここに来てもらったけど、本郷の旅館にいたというだけで、その前のことはあまり聞いたことがないわ」

「この際だから少し話をさせてもらおうか。俺は昭和十五年の辰年生れで・・・」
と語り始めた。

Gさんの家は、呉服橋のそばにあったが、父親が戦死すると荒川を渡った川口のあばら屋に移った。Gさんは三男の末っ子だった。戦中も敗戦後も食べ物がなく、いつも腹をすかせていた。母は子ども三人を育てなくてはならなかったたので、大変な苦勞をした。足袋を作る工場で働いていた。兄たちは中学を出ると、鋳物工場で働いた。

Gさんも中学を卒業すると、上野の旅館に働きに出た。昭和三〇年のことだった。まだ体が小さいから掃除や下足番、仕入れの荷車の後押しをやらされた。十七になると、中番といって布団の上げ下げをするよう

になった。一度に幾組もの布団を頭に乗せて、布団部屋から客室に運ぶ。これを客の夕食の時間内に済ませなければならぬので、大変な仕事だった。

修学旅行が中心の旅館だった。客筋が上野から本郷に移ったので、ここを辞めて本郷の鳳明館に移った。

昭和四十年だった。十年ほど仕事をやっているうちに、別館の番頭にもなった。しかし、四、五年すると、都内に学生相手の安ホテルが建つようになった。「かたまり」、Gさんたちは団体をそう呼んだ。修学旅行や社員旅行のかたまりが減って、本郷界限はどこも苦しくなった。旅館をたたむところも増えた。長く居ても申し訳ないので、辞めて旧名水道橋旅館、現在の花旅館の世話になった。

「他に能がないので、かれこれ七十一年以上旅館の仕事一筋だったよ」

「すごい」
と皆が感嘆の声を上げた。

「で、ここで皆に話すことがあるんだ。良い機会だから言おうと思う。実は体が以前のように動かなくなっちゃったんだ。まだ未練はあるよ。ここで死んでもいいと思っている。でも、皆に迷惑をかけるので、切りが良いのでこれを機に引退しようと思う。また息子

のところ世話になるよ」

引き留めてもGさんの意志は固かった。夏の繁忙期が済んだ日に、花旅館を去って行った。

翌年の二月のことである。

花が廊下で転んで入院をした。右脚の骨折だった。医師からは大腿骨転子部骨折と診断された。幸い手術の必要はなく、ギブスの装着で改善できるらしい。しかし高齢者の骨折は治りが遅い。リハビリ後は花旅館の居室で歩行の練習をした。はじめは手押し車を、少し良くなると多脚杖を使い、改善すると通常の杖で歩けるようになった。花の介助は咲子や由美子、幸子が交代で行った。

Gさんが去り、花が入院してからは、予約の人数を制限した。二人を欠いた上、花の介助も必要なので、今まで通りの客数をこなすことはできなかった。

花が帳場に立てなくなつてからは、咲子が代わりをすることが多くなつた。客は男性よりも女性に頼み事や相談をする傾向がある。咲子は花の代役をそつなくこなした。一人暮らしの寂しさを紛らわすかのように、以前に増して甲斐甲斐しく働いた。

花の容態がだいぶ良くなった日曜日のミーティングのことである。

「みなさん本当にありがとう。私一人ではとてもここまで回復することはできませんでした」

「そんなこと気にする必要はないよ。俺たちは家族と同じじゃないか」

と山田が言うと、花がこんなことを言い出した。

「お医者さんとも相談したんだけど、元のように仕事をするのは無理そうです。だから隠居することになりました。若い積りでも、もう八十三歳よ。このまま皆を煩わせるわけにはいきません。老人ホームで世話をしてもらうことに決めました」

花は既に数か所の有料老人ホームを検討して、熱海の施設に入ることに決めていた。亡夫が残してくれた株を売った代金がまだ残っているので、入所の費用は十分に賄えた。

「前々から海のそばで暮らすのが夢でした。それと、リハビリ施設にいた時に、隣のベッドの同年代の方が俳句を作ってたの。同人誌に寄稿しているそうです。聞いているうちに、私も自分のことを何か書いてみたいと思うようになったの」

生きてきた痕跡を残したい、だからこれまでを振り

返り、まだ気力のあるうちに何かの形にまとめたい。

「私も同人誌に発表して、ある程度まとまったら自費出版して皆さんにご披露します」

「でも、花さんが隠居したら花旅館はどうなるんですか」

と咲子が尋ねた。

「もう決めています。回復するまでに時間があつたのでいろいろ考えました。その結果、ここを株式会社にします。その方がここを永く続けられるでしょ。社長兼女将は咲ちゃんに引き継いでもらおうと思います。誠さんとイーさんは専務」

咲子は啞然として何も言うことができなかつた。

「それがいいな」

と山田が言うと、

「私もそれが最善の策だと思えます」

と伊沢も同意した。

「社長は私なんかより、旅行業界の経験の長いイーさんや接客のベテランの誠さんの方が適していると思います」

「そうじゃないよ、咲ちゃん。俺は今年で喜寿、イーさんだつて七十五だ。この先何年手伝えるかわからない。咲ちゃんには、俺たちがいない後も花旅館を守つ

て欲しい。なあイーさん」

「そう、ここは永く続けて貰わなければいけないんだ。私たちにとっては、ここは心の拠り所なんだ」

「俺も専務だから、『何もせんむ』なんて言われないうように、体の続く限り頑張るよ」

「私も咲ちゃんを盛り立てて、これからも頑張る」

花が言った。

「咲ちゃん、私は熱海に引越すので、今のマンションは売ってここに住んだらどう。そうすれば、まだまだ先のことだけど、老後の資金が増えるでしょ」

咲子はしばらく無言でいたが、

「本当に私でいいのですか」

とつぶやいた。皆が、

「もちろん」

と答えた。これで話が纏まった。

「でも問題があります。Gさんは千葉に隠居してしまつたし、花さんも隠居してしまつと、イーと誠さんに私、それと時々由美子さんと幸子さんに手伝ってもらうだけでは、とても手が足りません。今のままでは以前のように満室にすることはできません」

すると花がこんな提案をした。

「皆さんに来てもらった時のように、また求人広告を

出せばいいのよ」

「それがいい。俺たちのようにやり残したことのある人たちがいるはずだよ」

「そう、ここは憧れの住む場所だから、いい人が必ず来てくれる」

数日後の日曜日の朝刊に、次のような求人チラシが入っていた。

外国人向け旅館のスタッフ募集

年齢 六十歳以上

勤務 週三日程度働ける方。

条件 お客さんに親切にできる方に限ります。

外国語ができる方歓迎します。経験不問。

時給 1000円。宿泊費が安いので、給料はあまり多く払えません。

連絡先 花旅館 03-XXXX-XXXX

(完)